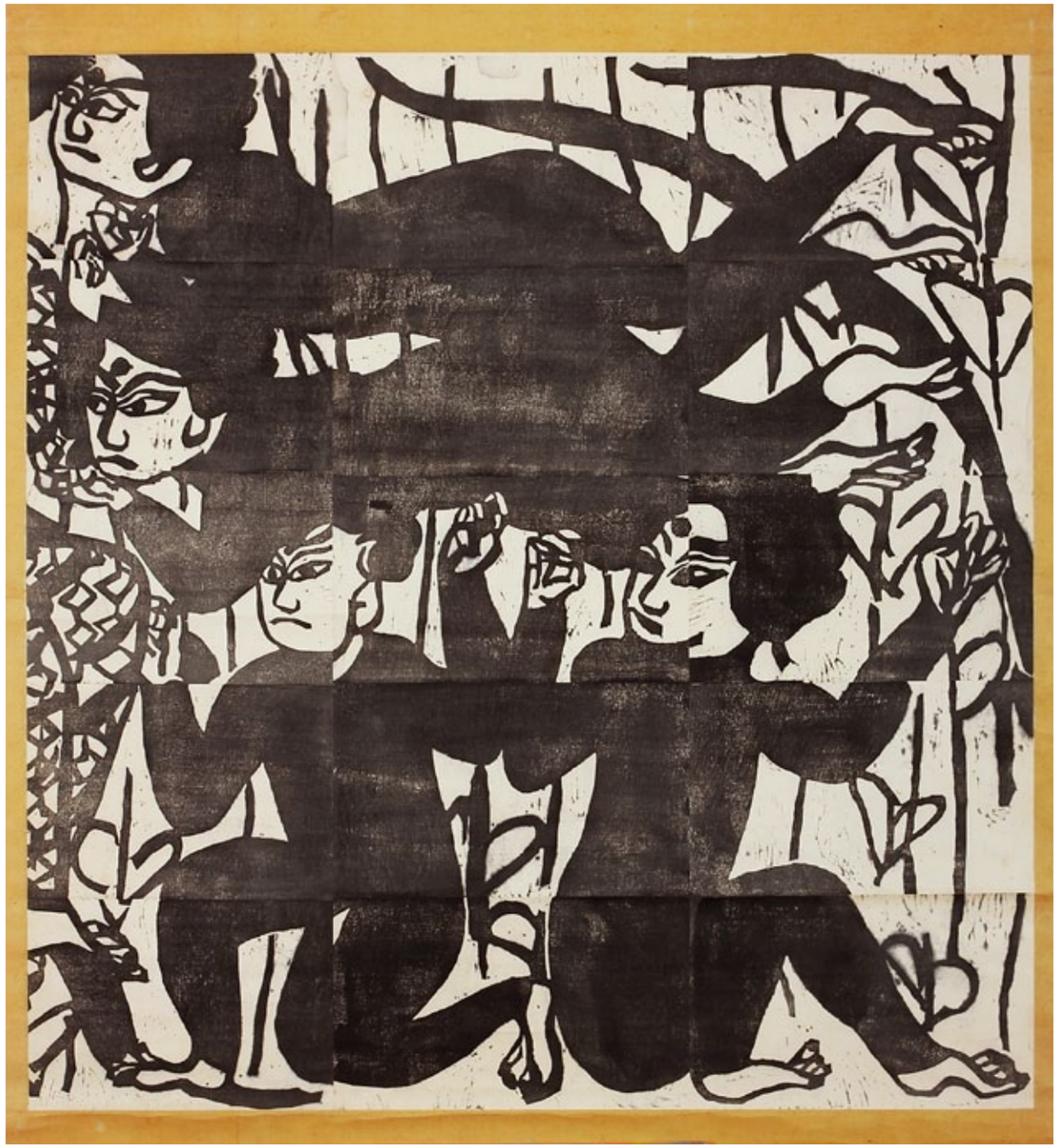
東北の工芸

1. 蓑（伊達げら）〔部分〕青森県南津軽郡　昭和 10 年代　幅42.0cm
2. 菊大紋春霞文様被衣　江戸時代　18世紀　庄内地方使用品　丈131.0cm
3. 菱刺衣裳〔部分〕　南部地方（青森県）明治時代　19 世紀
4. 樺細工貼合印籠　秋田県仙北市角館　1943年　高20.5cm
5. 海鼠釉片口　楢岡（秋田県）大正～昭和初期　高24.5cm

雨ニモ負ケズの柵（不来方板画柵）　棟方志功　1952年　縦30.3 cm

夜訪の柵（善知鳥版画巻）　棟方志功　1938年　縦22.5 cm



東北経鬼門譜　真黒童子（3幅のうち）　棟方志功　1937年　縦122.0cm

特別展

東北の工芸と棟方志功

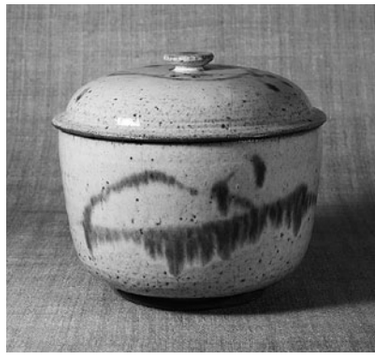
Tohoku Crafts and Shiko Munakata

2012年 4月3日(火) － 6月10日(日)

月曜休館（祝日の場合は開館、翌日休館）10:00-17:00（入館16:30迄）／一般 1,000円、大高生 500円、中小生 200円／〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-33／℡ 03-3467-4527／交通・京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩７分／西館（旧柳宗悦邸）公開日・会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜（開館時間 10:00-16:30、入館 16:00 迄）

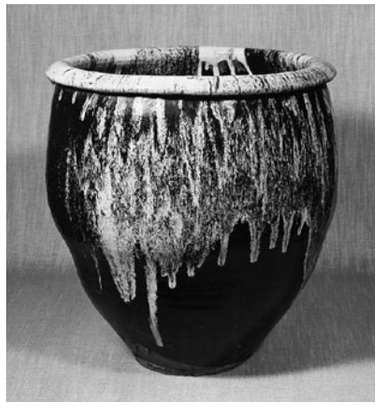
日本民藝館

http://www.mingeikan.or.jp/



藁灰釉緑流蓋物　会津本郷（福島県）
昭和時代初期　20 世紀　高 22.2cm

背中当（ばんどり）　山形県庄内地方
1939 年　幅45.0 cm



海鼠釉水甕　堤（宮城県仙台市）
明治時代　19 世紀　高 56.0 ㎝

特別展　東北の工芸と棟方志功

自然風土は民藝の生みの親であり、美の母胎である。青森の生んだ世界的な版画家棟方志功（1903-1975）も、東北の豊かな自然風土から美の滋養を汲み取り、生命感にあふれる作品の数々を世に送った。見る者を驚愕させるその独創的な板画（板から生まれた板による画という意）作品は、まさに純粋無垢な魂の発露ともいえよう。

豪胆な構図や豊潤な色彩で知られるが故に、直情的な感性の持ち主として棟方は語られる。しかし、実際の棟方は深い洞察力を備えた、万物への畏れや敬虔な祈りを心に宿す人物で、それらを根底として自らの芸業を支えている。

祈りの心といえば、「東北経鬼門譜」（1937年）という作品がある。版木120枚を使い、六曲一双の屏風を広げると、実にその長さは10メートルにもなる。戦前期最大の作品で、まさに圧巻である。棟方は、東北という日本の「鬼門」にあたる貧寒の故郷を想い、仏の力を借りてこの地を幸あらしめたいと願ってこの制作にあたった。

左右に分かれる屏風の中心には身を二つに割った鬼門仏（阿弥陀如来）が描かれ、その仏をはさむ形で右隻と左隻にそれぞれ菩薩・羅漢・行者・人間・水子を配し、鬼門仏の光に浴しつつ極楽浄土へ導かれるという行程を表現した。棟方は、身を割った仏の間から諸々の悪霊や禍を通すことで、それらを鎮めてくれるよう念じたのである。

なお、同じく郷里青森への思いを込めた作品に「善知鳥版画巻」（1938年）がある。この作品は謡曲「善知鳥」をもとにしたもので、鳥獣を殺すことを生業とした猟師とその妻子、そして殺される側の善知鳥親子の双方の情愛を描いた悲哀の話である。棟方は、愛情深い海鳥の親子の別離の悲しさや、生活のための殺生とはいえ、その罪の報いで亡者となった猟師の苦しみを、故郷への思いと重ね合わせながら板に彫り込んでいった。

棟方にとって、これらの作品そのものが故郷への「祈り」であった。東日本大震災から一年。未だその災禍に苦しむ東北の地に、棟方志功の深い鎮魂の想いが届くよう、心から願ってやまない。

その他、本展では東北の民窯（久慈焼・平清水焼・白岩焼・楢岡焼・会津本郷焼・堤焼等）、蓑・けら・背中当などの編組品、南部菱刺し・津軽こぎん・被衣などの染織品、樺細工や漆工品など、誠実な仕事と丹念な手技による東北各地の諸工芸の優品も展示される。

伝統を大切にする堅実な暮らし振りからは、実に豊かな工芸文化が生まれた。健康的で力強さに溢れるその固有の造形美は、まさに日本列島の北における「民藝の宝庫」を見る思いがする。

※巡回展・豊田市民芸館（9 月中旬～ 12 月上旬予定）

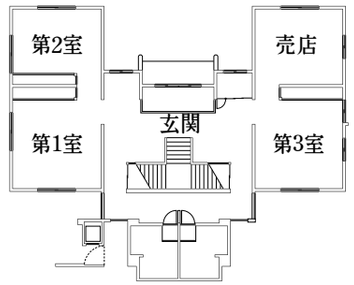
記念講演会　**棟方志功– 東北を想う**

〔講師〕**石井頼子（棟方板画美術館学芸員）**

5月12日㈯ 18:00–19:30　会場・日本民藝館大展示室

料金・300円（入館料別）　定員・100名（要予約、TEL.03-3467-4527）

展示室 1 階



〔 玄 関 〕特別展　**東北の工芸と棟方志功**

東北地方で作られた明治から昭和期の民窯（久慈焼・平清水焼・白岩焼・楢岡焼・会津本郷焼・堤焼等）の焼物と、江戸期に作られた秀衡や浄法寺の椀や片口などの木漆工品。壁面には、棟方志功の板画作品や書軸の優品を展示します。

〔第 1 室〕**日本の民陶**

当館が所蔵する民陶の優品を中心に、約 40 点を展示紹介いたします。民陶とは民間の窯で作られた焼物の総称で、官窯作品に対する言葉です。展示品は九州諸窯・瀬戸など、東北地方を除く窯場の陶器で、主に実用品として江戸期に作られました。

〔第 2 室〕**装いの美　―装身具の世界―**

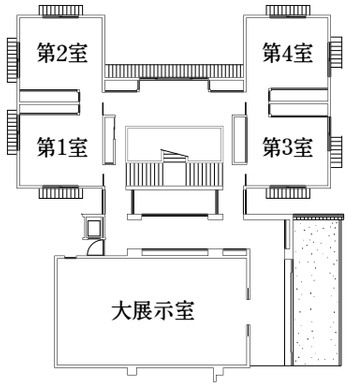
館蔵品より、装飾や信仰の象徴として身につけた台湾の色彩豊かな蜻蛉玉や、アイヌ玉首飾り。併せて、動物の骨やトルコ石を用いたアメリカ先住民族や各国の装身具を、朝鮮半島や北欧の工芸品、台湾先住民族の貝珠やビーズ飾衣裳とともに紹介します。

〔第 3 室〕**アイヌの衣裳**

アイヌの機で織った樹皮の布に本土から渡った木綿を切伏せした厚司や、本土から渡った木綿地に絹や木綿の古裂でアイヌ独特の模様を切伏した衣裳、儀礼用の刀下げ帯など精霊信仰に根ざした暮らしから生まれた力強い造形の数々をご紹介します。

〔第 2 室〕首飾り　骨・トルコ石
アメリカ先住民　19 世紀

展示室 2 階



〔大展示室・本館及び新館回廊〕

特別展　**東北の工芸と棟方志功**

〔第 1 室〕**朝鮮半島の陶磁　―花鳥文・草文を中心に―**

柳宗悦や浅川兄弟らによって日本に紹介された朝鮮時代の陶磁。中でも染付による「秋草手」は、日本人に特に親しまれてきました。本展示では、染付・鉄砂・辰砂などによって絵付がなされた花鳥文や草文の陶磁を中心に、朝鮮半島の陶磁器を紹介します。

〔第 2 室〕**河井寛次郎・濱田庄司作品**

柳宗悦は、同志として民藝運動に尽力した河井寛次郎、濱田庄司について、彼らの才能を「釉薬に優れ、類まれな仕事をした」河井、「地に足がついて形の確かな」濱田と形容しています。当館蔵の河井・濱田の陶磁作品を紹介します。

〔第 3 室〕**棟方志功　―「祈り」と「自然」**

様々な主題の板画を制作した棟方志功の作品の中から、本特別展に併せて、「祈り」と「自然」をテーマとした作品を展示いたします。柳宗悦の表具案により軸装などに仕立てられた、当館独特の棟方作品の魅力をご堪能下さい。

〔第 4 室〕**東北地方の諸工芸**

東北地方は工芸の宝庫です。特に民衆のために作られた実用品は、江戸時代から昭和前期の間に多彩な手仕事として花開きました。今回は、当館が所蔵する漆器・絵馬・編組品など、諸工芸の優品約 30 点を展示紹介します。

関連企画　**日本民藝館の器でお茶をのむ　―志功流お茶の楽しみ**

〔講師〕**石井頼子（棟方板画美術館学芸員）**

日時　4月15日㈰ 第 1 回11:00–12:30、第2回14:00–15:30　全2回、各回12名（要予約）

会場　日本民藝館西館（旧柳宗悦邸）　　会費　3,000円（入館料込）

〔第 2 室〕鉄絵茶碗　濱田庄司
1945 年　径 13.5 cm